

地域を教材とした環境教育、その8年目 町田市立つくし野小学校ビオトーププロジェクト(東京都)

環境教育は、意識もしやすく取組みも小さなことから始めることができるが、実際には大きな問題であるだけに、その軸をどこに置くかが大切になってくる。東京都町田市で、8年にわたって自然体験活動を子どもたちに提供している取組みがあると聞き、町田市の南に位置するつくし野地区を訪れた。

町田市とつくし野地区

東京都町田市の南端に位置するつくし野地区は、丘陵地を切り拓いてつくられた住宅地である。東急田園都市線が横浜市との境を走り、つくし野駅前には日用品を買うための店舗は並んでいるものの大型集客施設はなく、住むための街といった印象がある。町田市は、市役所・町田駅周辺や北部のニュータウン地域を中心に進む都市化・商業化と比べれば、南部は自然が残されている印象がある。もとは丘陵地だったつくし野地区も起伏に富んだ地形に住宅は整然と建ち並び街路樹や公園も整備されているため、視覚的には緑を意識することのできる地域といえるだろう。また、線路をまたいだ横浜市に広がっているのは、森村学園と横浜市所有の森だ。

初期の活動

町田市立つくし野小学校は、この地域に昭和46年に開校した小学校である(当時は南第一小学校の分校として開校)。この学校で、子どもたちに自然を体験できる機会を設けたいとビオトーププロジェクトと呼ばれる活動が始まったのは、今から8年前の平成18年である。きっかけをつくったのは当時校長だった田



町田市立つくし野小学校ビオトーププロジェクト(2013年6月活動の集合写真)

村健治さん(現町田市教育委員会)。この地域には緑はあるものの、子どもたちがその手に触れて体験できるものは少ない。そのため自然と触れ合う活動を通して生命や環境の大切さ、身近な地域について学んでほしいと始めたものだった。

田村校長(当時)は学校内に町田市の自然の一部をビオトープとして復元し、授業や休み時間にみて、触れて、感じられる空間をつくることを構想し、保護者や地域住民の協力を得ながら取組み始めた。校内に設置されていたコンクリートブロック製の水槽を利用した「カブトムシ御殿」の製作とそこで育成したカブトムシによる“カブトムシ相撲つくし野場所”の開催、地域を流れる恩田川の環境を復元した「トンボ池」の整備と観察など、多岐にわたる活動を行っていた。その成果は、平成22年に公益財団法人日本生態系協会の主催する全国学校ビオトープコンクールでの銅賞受賞などの評価を受けている。

現在の活動の様子

平成21年度で田村校長が異動した後は、引き継いだ学校長やPTAの理解・支援を受けながら、地域ボランティアがプロジェクトの主体となって現在も活動が続いている。今年度でシーズンⅧを迎え、昨年度からは同校PTAの関連団体に位置づ



6月 学校のプール開きの前に、ヤゴを救出した



7月 大人は記録に、子どもは結果に夢中のカブトムシ相撲

けられた。地域住民や保護者の他、大学生や企業ボランティアなども活動に参加している。現在は、つくし野を1つのビオトープと見立てながら地域の自然に触れてさまざまなことを感じ取る内容を主に、原則毎月第二土曜日の午後を活動日としている。多岐にわたった活動が行われ、参加者は、1回につき、50名から多いときで150名超のときもある。毎回参加する家族もあれば、卒業生の姿も目に見ることがある。サツマイモを植えてから収穫するなどの継続した活動もあるが基本は1回1テーマで、自然を構成する要素である風や光、火・水に関連した場所で生物多様性につながる活動をしていることは活動の不動の軸になっている(下表参照)。

現在の活動の中心を担っている環境カウンセラー/一級ビオトープ計画管理士/建築家の小池常雄さん(元同校保護者)も、「子どもたちが五感を使って体験することとその中で生物多様性を感じ取ってもらうこと」が活動の目的という。活動冒頭のお話では、クイズを交えながらトンボも森もサツマイモも、みんな生物多様性につなげる説明を繰り返す。活動が始まると子どもたちは、清掃前のプールは服も濡れて水も汚いと嫌がっていたはずなのに、いつ

表 平成25年度の活動

- 4月 オリエンテーション(校内)
- 5月 サツマイモなどを植える(徒歩10分ほどの畑)
- 6月 プールのヤゴ救出(学校のプール)
- 7月 森の学習会(徒歩10分ほどの里山)
- 7月 カブトムシ大相撲(校内)
- 9月 カボチャの収穫(徒歩10分ほどの畑)
- 10月 地域の自然を学ぶ(相模原市立博物館)
- 11月 サツマイモの収穫(徒歩10分ほどの畑)
- 12月 焚き火(校庭)
- 1月 小鳥の観察と巣箱づくり(校内)
- 2月 里山の探検(徒歩10分ほどの里山)
- 3月 年度末特別活動(昨年度は校内でろうそくづくり)

(12月15日現在。()内は活動場所。1月以降は予定)

の間にかプールの底に膝をついて網でヤゴを掬う、芋掘りでは手が汚れないようにそっと蔓に手をのばしてはいたはずが、芋の周囲を素手で掘り始める、といつの間にか(一部の大人も)野生に返る。大人からみれば、これは生活の一部だったと思われるかもしれないが、安全確保の観点から自然を体感する場所(遊び場)そのものがなくなり、さらには体験の仕方(遊び方)も失われた昨今の事情を振り返れば、昭和の時代にこうした遊びが日常的にできたことは、現在いわれている自然体験そのものだったといえるのではないかと。

活動が子どもたちに染み込む

この活動のポイントは活動後にもある。子どもたちは畑に植えた作物の収穫(収穫した作物は持ち帰ることができる)によって普段口にするものがどのようにつくられるかを体験する。プール清掃前のヤゴは数日でトンボにかえる直前まで成長しているので、やはり持ち帰って羽化の観察を通して生命の尊さと儚さ(多数が羽化を失敗する)を感じる。こうした、活動後にも活動の内容を意識できるプロセスがあることに加え、この活動は保護者も多く参加している。保護者の参加は子どもたちの安全確保が第一の目的であることは当然だが、参加することでその日の夕食での話題がビオトーププロジェクトとなるのは自然なことだろう。それが復習の代わりとなって、体験で感じたことが子どもたちに染み込んでいく。決して明日の試験に役立つわけではないが、何らかのきっかけで“あの体験”が生きてくる。そんな場面は、成人したものならば誰もが経験しているのではないだろうか。そんな効果も期待できる。



9月 これから収穫するかぼちゃについて、クイズ形式で学ぶ。出題しているのは代表と大学生



10月 距離が近いことから同じような自然が形成されている相模原市の市立博物館に地域の自然を学びに行く



11月 サツマイモを地表のツルから探して収穫する



12月 焚き火の火は6年生が起こす。この火で収穫したサツマイモを焼いて食べる

平成24年には、参加していた児童の1人が、体験を通じて書いた作文で子ども環境大賞(朝日新聞社主催/東京海上日動共催)の優秀賞を受賞したという。平成26年1月には、公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団が主催する「第12回トム・ソーヤスクール企画コンテスト」(後援:文部科学省ほか)学校部門の最優秀賞となる「文部科学大臣奨励賞」の受賞が決まっている。地域の大人と自然の思いが、子どもたちに受け継がれると感じる1コマだ。